

# 沿海州南部新石器時代後半期の土器編年

## The pottery chronology of the later half of the Neolithic Age in the Southern Far East of Russia

宮本一夫  
MIYAMOTO Kazuo

### 1 はじめに

沿海州南部の土器編年は、1950年代から始まるオクラドニコフやアンドレエフなどの一連の調査により、次第に整備されていった。特に、アンドレエフのザイサノフカ1遺跡の発掘調査（Андреев 1957、ゲ・イ・アンドレエフ1982）やハサン地区での発掘調査（Андреев 1960）こそが基本的な土器群を提示することになったのである。一方、日本においても、縄文土器の短期編年構築のため、早くに佐藤達夫らが注目し、その簡易な編年を打ち立てた経緯がある（佐藤1963）。また、1980年代にはプロジェクトが、逆に日本列島や朝鮮半島の土器編年を参考にして、新たな年代観を示したこともあった（Бродянский 1979）。その後、大貫静夫は朝鮮半島東北部の西浦項遺跡の層位的資料を参考に、ザレチエ遺跡などの資料を再考し、一定の土器編年の方向性を打ち出していった（大貫1992）。すなわち、刺突文系土器のザレチエタイプから沈線文系のザイサノフカタイプといった大きな土器変遷の流れである。この流れは土器変遷を考える上で重要な基本図ともいえるものであるが、その後、1980年代後半から1990年代にかけてのボイスマン遺跡の調査（Попов et al. 1997・Востречов et al. 1998）によって、ザレチエタイプの刺突文の位置が確定し、ボイスマン文化期が設定されるとともに、さらにはその細分が議論されてきている。特に、ボイスマン2遺跡の層位的な調査成果により、ボイスマン下層に新たな土器群が存在し、さらにボイスマン文化期を5段階に細分するモレヴァの論考は注目される（Морева 2005）。また、これまであまり注目されていなかった縄線文土器の出土が増え、その位置づけにおいて議論されるようになってきた（福田ほか2002、Морева et al. 2002）。基本的な考え方は、刺突文系のボイスマン文化期と沈線文系のザイサノフカ文化期の中間をつなぐものという位置づけが、クロウノフカ1遺跡の調査などによって強調されるようになってきている（Miyamoto 2004）。また、伊藤慎二によってウスチノフカ8遺跡の調査成果から沿海州南部の土器編年を再考し、周辺の地域との併行関係を問題にする論考も現れている（伊藤2005）。

さて、このたびのロシア科学アカデミー極東支部のヴォストレツォフ研究員と熊本大学の甲元眞之教授を中心とした日ロ共同発掘調査においては、沿海州南部地域における初期農耕化の問題を解明すべく、沿海州南部の内陸部と海浜部の遺跡を5年間にわたって発掘調査することになった。初期農耕化という問題の性格上、結果的に新石器時代の後半期を対象とする調査となった。調査されたクロウノフカ1遺跡、ザイサノフカ7遺跡、クラーク5遺跡は、偶然にもボイスマン文化期からザイサノフカ文化期の中間に位置づけうる縄線文土器段階から、ザイサノフカ文化の一連の連続する遺跡群であった。縄線文土器であるクロウノフカ1遺跡や新石器時代終末期のクラーク5遺跡といった新発見の土器段階を、一連の遺跡群の相対的な比較によって位置づけが可能になったといえよう。さらには、これらの相対的な関係をより明らかにするため、1954年にアンドレエフによって発掘調査されたザイサノフカ1遺跡の土器資料を再調査する機会を得た。これにより、クロウノフカ1遺跡→ザイサノフカ7遺跡→ザイサノフカ1遺跡→クラーク5遺跡というほぼ連続した流れを理解することができる

ともに、土器の型式変化をより詳細に追うことができるようになった。さらには、周辺地域との関係性もより具体的な推測が可能となったといえよう。本稿では、ボイスマン文化期のモリエバによる土器編年の細分（Морева 2005）を受け、さらにその後続く段階のクロウノフカ 1 段階以降の詳細な土器編年を検討するものである。

なお、その土器編年作成の方法は、まずクロウノフカ 1 遺跡、ザイサノフカ 7 遺跡、ザイサノフカ 1 遺跡、クラーク 5 遺跡といった個々の遺跡での型式細分を統一的に行うことにより、各遺跡での出土位置関係や層位的な関係を根拠に、相対的な序列を確立することにある。さらには、文様と器形の変化やその系譜関係、さらには器種組成の変化といった様式的な枠組みを製作することによって、これらの時期における土器変遷の段階性をより明確なものとする事ができる。これによって、これら地域の社会背景を土器という文化の一様相からもある程度想定が可能であると考えられるのである。さらには初期農耕化における文化背景や文化変化現象における起因を推定できる可能性がある。

## 2 クロウノフカ 1 遺跡

クロウノフカ 1 遺跡では、新石器時代文化上層において 4 号住居址と 5 号住居址が発見されている。4 号住居址と 5 号住居址覆土内出土遺物をそれぞれ一括遺物と見なすならば、一部の土器には両者の住居址覆土内から出土した土器片に接合関係を見ることができるものもあり、覆土の堆積は比較的接近した時期のもの可能性がある。

4 号住居址・5 号住居址内出土土器は、すべて平底の深鉢からなるが、文様構成から大きく 3 群に区分できる。撚糸文の縄線文からなるグループと沈線文からなるグループ、さらに櫛状工具の刺突文からなるグループである。縄線文グループは 2 類に、沈線文グループは 4 類に細分することができる。刺突文土器群はボイスマン文化期の土器の系譜が残った段階のもの可能性があるが、ごく少数であり、主体は縄線文土器群と沈線文土器群である。刺突文系土器群を A 群、縄線文土器群を B 群、沈線文土器群を C 群、縄線文と沈線文からなる折衷土器群を D 群とするならば、主体である B 群土器群と C 群土器群を中心に細分を試みたい。分類基準は主に文様構成からなるが、これが様式性を示すものであり、さらにこれら文様構成属性の下位の分類基準として、深鉢とコップ型土器という器種属性を付加する。コップ形土器とは既にアンドレエフがザイサノフカ 1 遺跡の報告において使用した名称であるが（Андреев 1957、ゲ・イ・アンドレエフ 1982）、深鉢に比べ小型でミニチュア土器状であり、コップ状の形態をするものである。複数の器種が同時存在すると仮定して様式的に捉えるために、深鉢を a 類、コップ形土器を b 類と区分し、土器文様構成属性の下位に付加して、分類の記号化した。なお、刺突文土器群は深鉢のみからなることから、文様の細別型式を示すに留める。

### (1) 土器の型式分類（図 1・図 2）

#### A 群土器群（刺突文系土器群）

##### ① 深鉢

1 f 類（図 1 - 6、報告書 i 類）：櫛状工具による横方向の斜線状の連続刺突文である。

1 g 類（図 1 - 8、報告書 j 類）：横方向の押し引き刺突文が多段に施されるもの。

#### B 群土器群（縄線文グループ）

##### ① 深鉢

1 a 類（図 1 - 9 ~ 13、報告書 a 類）：平行線文によって横帯区画することにより、平行線文と斜格子文や組帯文のようなハッチング状の文様を交互に配置するものである。文様帯は口縁部から始まるが、底部近くは無文帯を形成する。

2 a 類 (図 1-15・16、報告書 c 類)：綾杉文や短斜線文が帯状に多段に施されるもの。

#### ②コップ形土器

1 b 類 (図 1-14、報告書 b 類)：縄線文によって口縁部が斜線文、その下位が平行線文からなる分割文様帯をなし、コップ形土器を呈する。

#### C 群土器群 (沈線文グループ)

##### ①深鉢

1 a 類 (図 2-22、報告書 e 類)：口縁部から胴部にかけて帯状に組帯文が多段に施されるものである。分割文様帯間には文様帯を区切る平行沈線文が施される場合が多い。組帯文以下を無文化するものと、胴部以下を平行沈線文で埋め、胴部下端を無文化する 2 種類がみられる。

2 a 類 (図 2-28、報告書 g 類)：短い沈線文からなるもので、平行沈線文による横帯区画を施してのち、斜格子文の横帯文を施すものである。

3 a 類 (図 2-25、報告書 h 類)：文様構成としては B 群 2 a 類に類似するが、沈線文からなるものである。口縁部には一段のハッチング状の組帯文が施され、その下部に綾杉文を数段施し、さらにその下部に短斜線文を施すものである。綾杉文以下の文様構成は B 群 2 a 類と同じである。

#### ②コップ形土器

1 b 類 (図 2-23、報告書 f 類)：深鉢 1 a 類と同様に帯状に多段の組帯文からなるものであり、コップ形土器である。

#### D 群土器群 (縄線文と沈線文の折衷土器)

##### ①深鉢

1 a 類 (図 2-21、報告書 d 類)：口縁部に帯状に短斜線文が施され、その下部にはハッチング状のやや荒い沈線文による組帯文が施されるものである。短斜線文は撚糸文である縄線文からなるものであり、縄線文グループと沈線文グループの折衷土器である。組帯文の構成が縄線文グループの組帯文に比べ、規範性が乏しく乱雑なものになる傾向にある。

#### (2) 土器型式の変化

これら 4 号住居址と 5 号住居址内部出土土器は、器種的には深鉢とコップ形土器からなる土器群である。また、文様的には縄線文と沈線文という二つの文様系統に分かれるが、文様構成においては両者は類似している。少なくとも集線状の文様を帯状に多段に施す B 群 1 類と C 群 1 類や D 群 1 類は、文様構成上は同一であり、同一時期に属する一つの土器様式と判断されるものである。また、このような集線状文様を多段に分割して施すものから、簡略な集線文が施されるものへ、あるいは集線文が一部施されるか施されることなく、集線文が簡略化したと想定される綾杉文や短斜線文が分割して多段に施されるものへの変化が想定される。その変化したものとは B 群 2 類であり、C 群 2 類・3 類である。しかも、B 群 1 類は B 群 2 類へ、D 群 1 類は C 群 2 類へ、C 群 1 類は C 群 3 類へとそれぞれが変化していく可能性が想定されるのである。個々の型式が組列関係を結んでおり、個々の組列状を型式変化していくものとの想定である。特に D 群 1 類から C 群 2 類への変化は明確であり、D 群 1 類の口縁部にある縄線文が C 群 2 類の口縁部短斜線文へ変化し、D 群 1 類の胴部多段の集線文が C 群 2 類の細いヘラ状工具による斜格子文へと変化する。このように、深鉢とコップ形土器からなる B 群 1 a・1 b 類と C 群 1 a・1 b 類・D 群 1 a 類というクrouノフカ第 1 様式段階から、深鉢とコップ形土器の B 群 2 a 類と C 群 2 a 類・3 a 類というクrouノフカ第 2 様式段階へと変化すると考えられるのである。

ではこうした想定が、実際の土器出土状況やその空間位置から検証できないかという分析に移りた

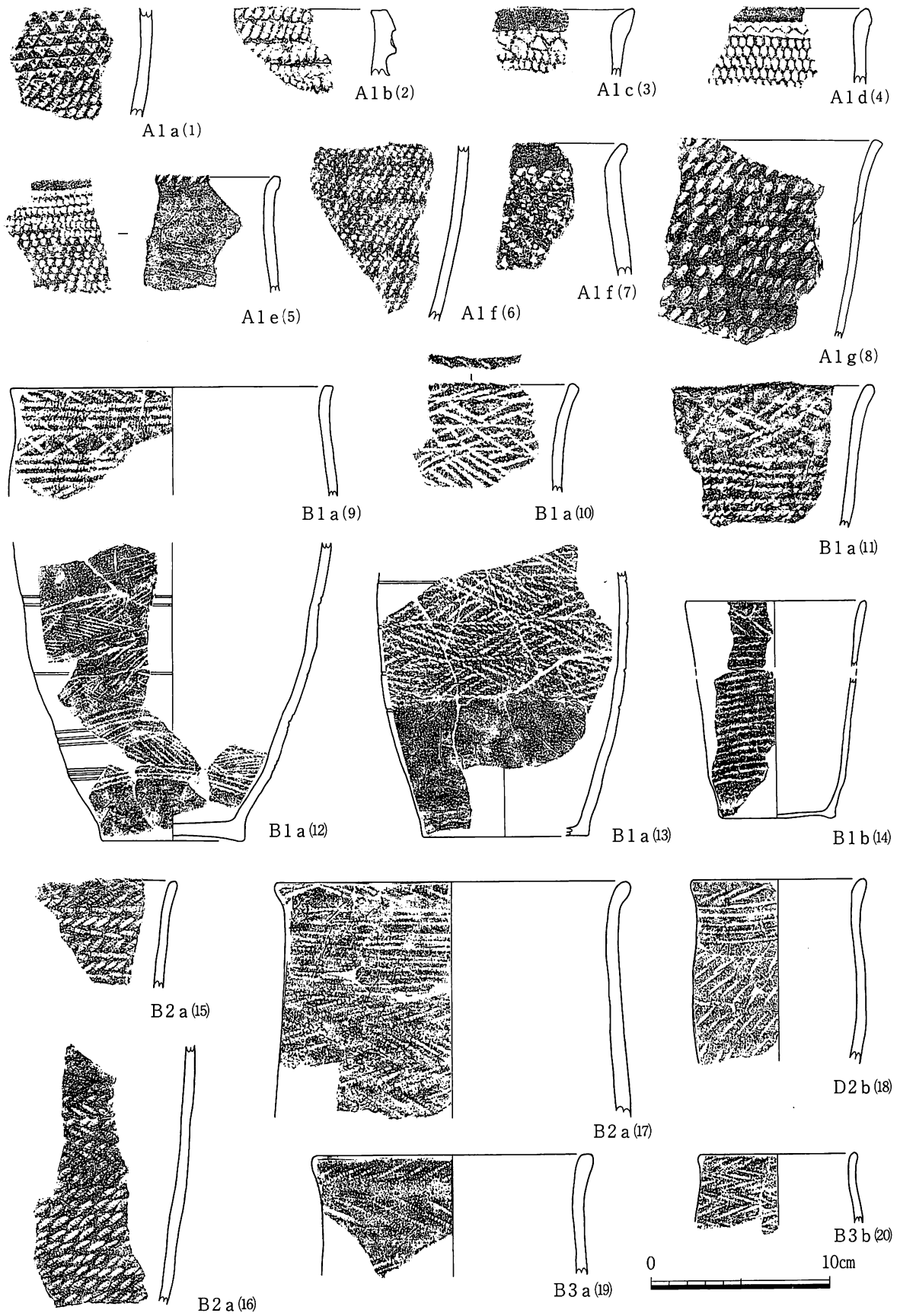


図1 沿海州南部の新石器時代土器型式

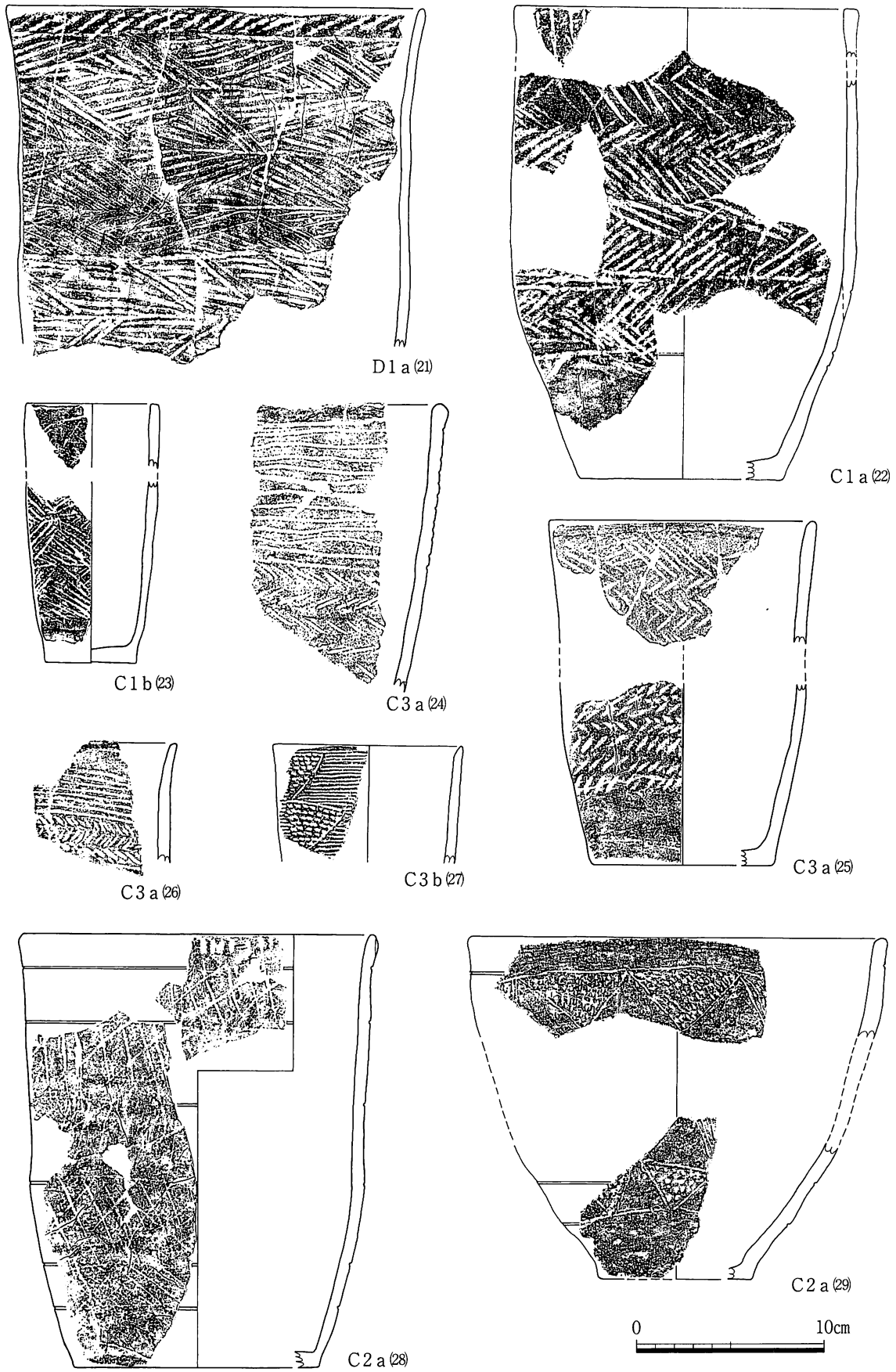


図2 沿海州南部の新石器時代土器型式

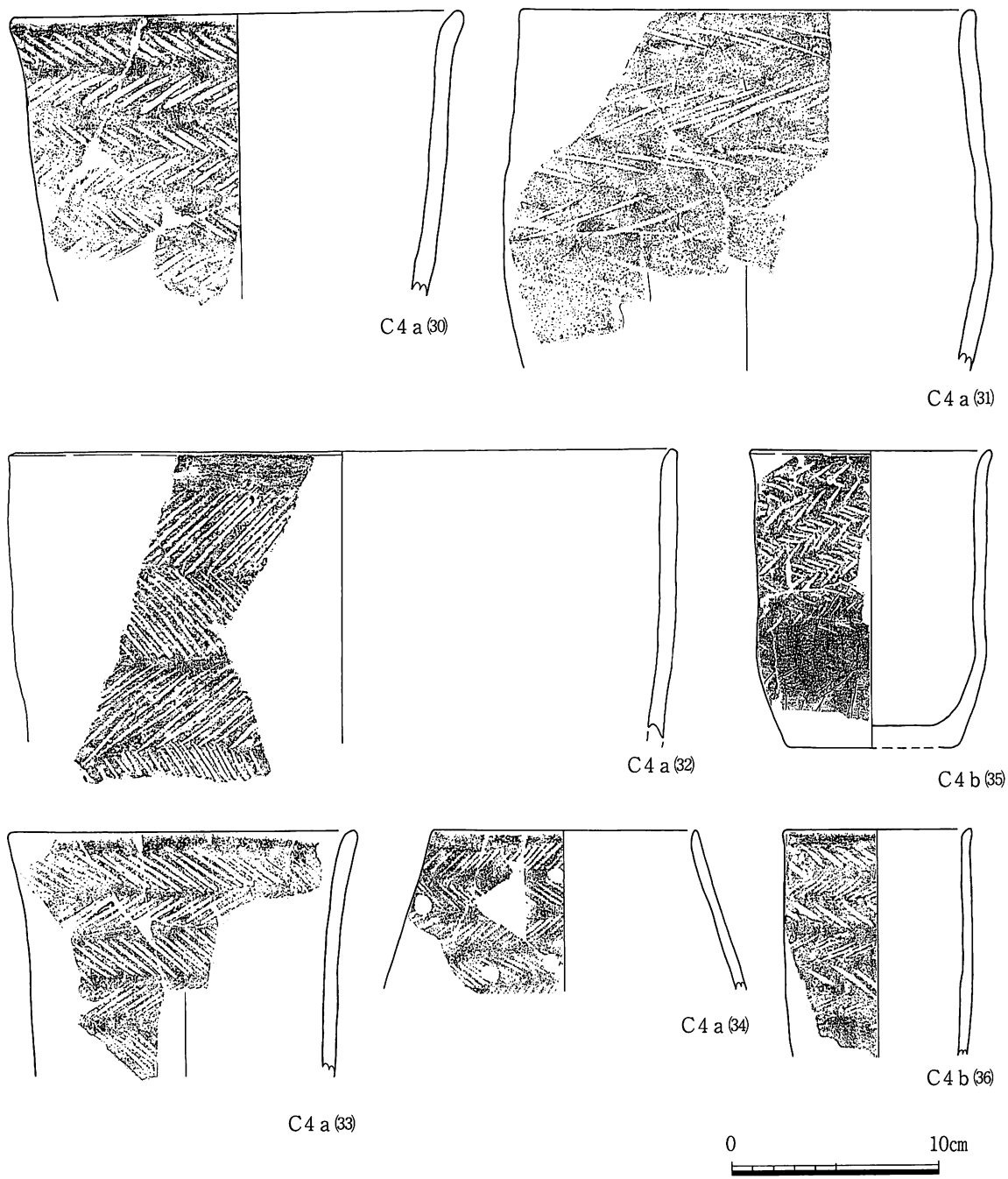


図3 沿海州南部の新石器時代土器型式

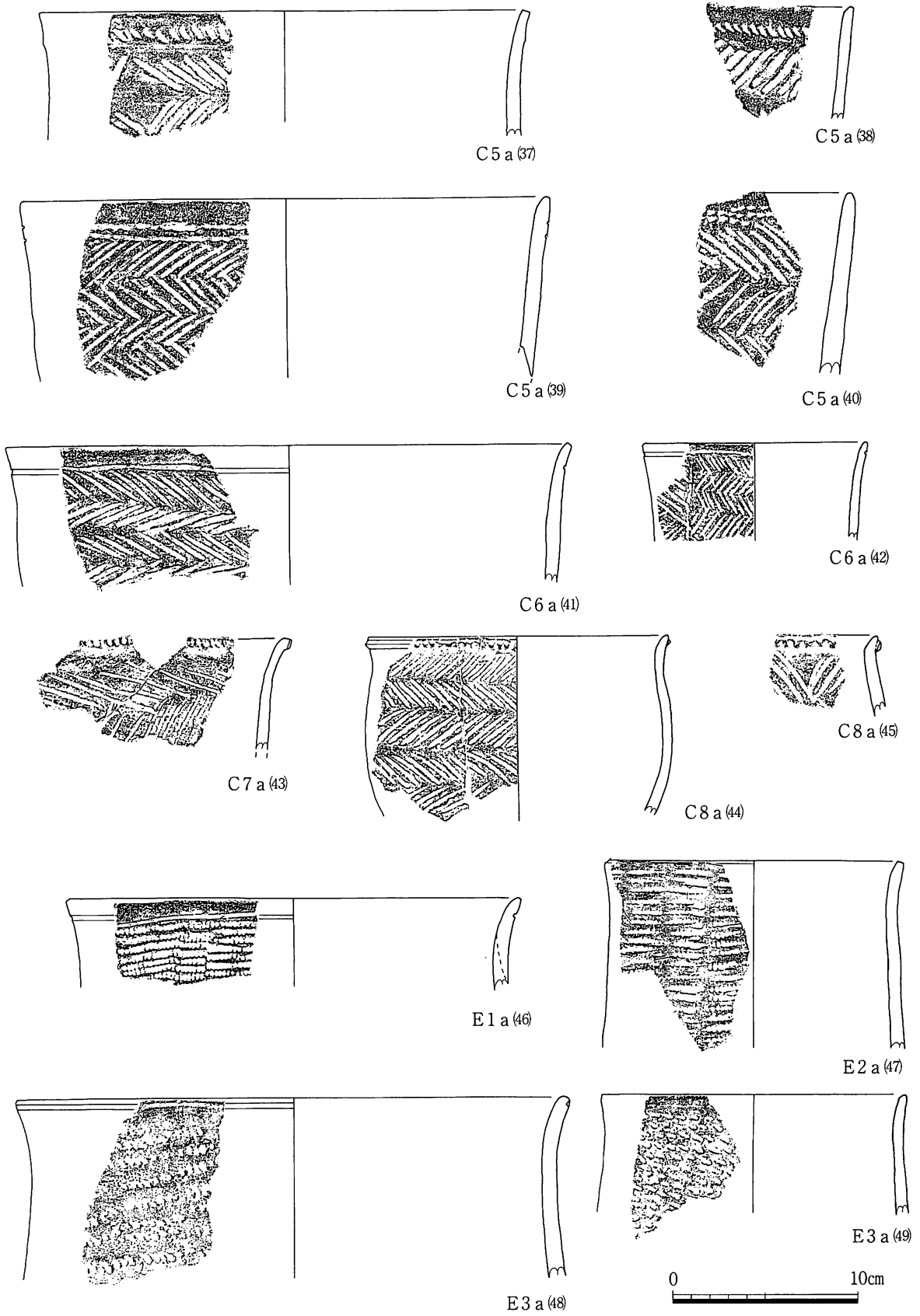


図4 沿海州南部の新石器時代土器型式

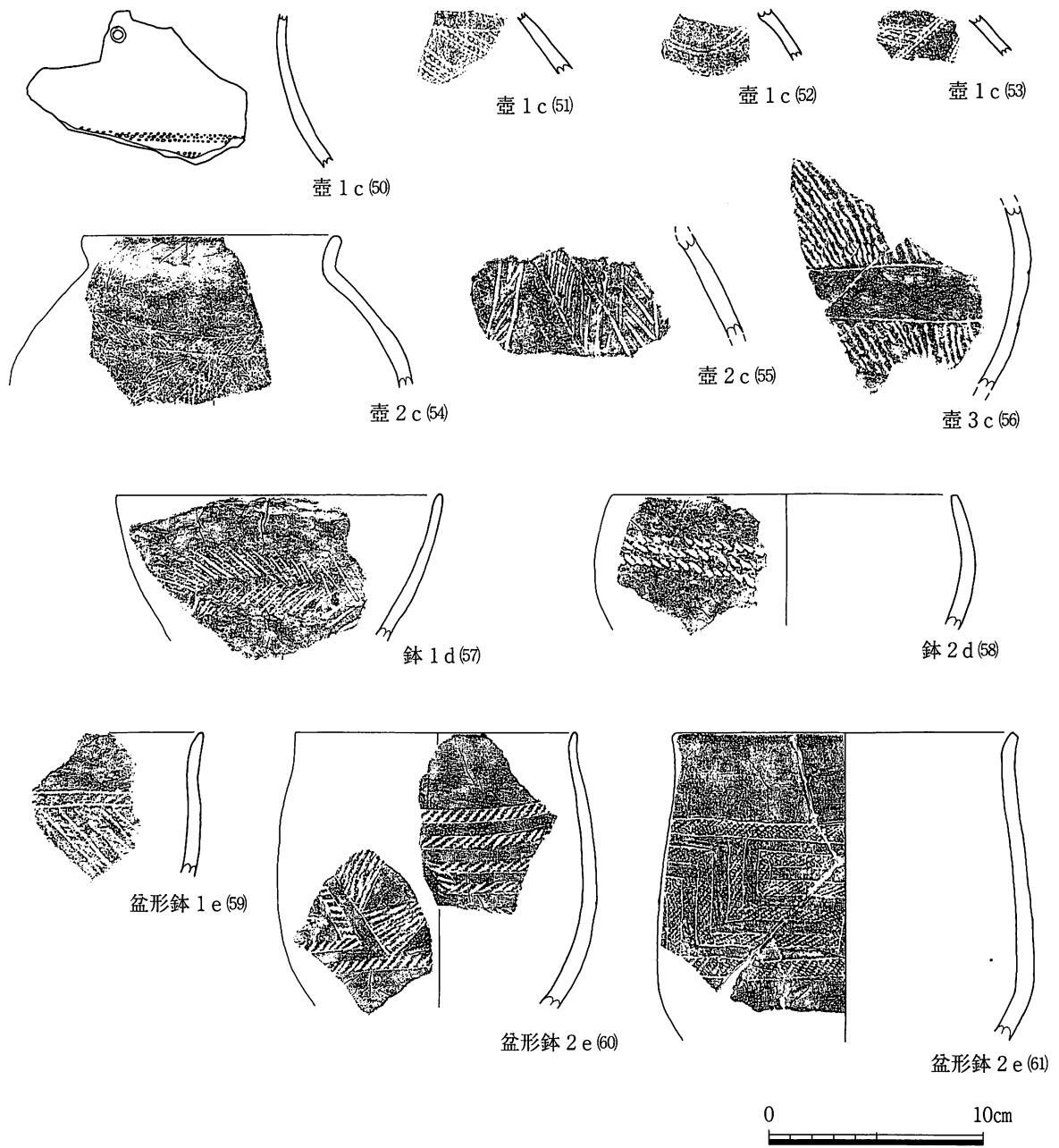
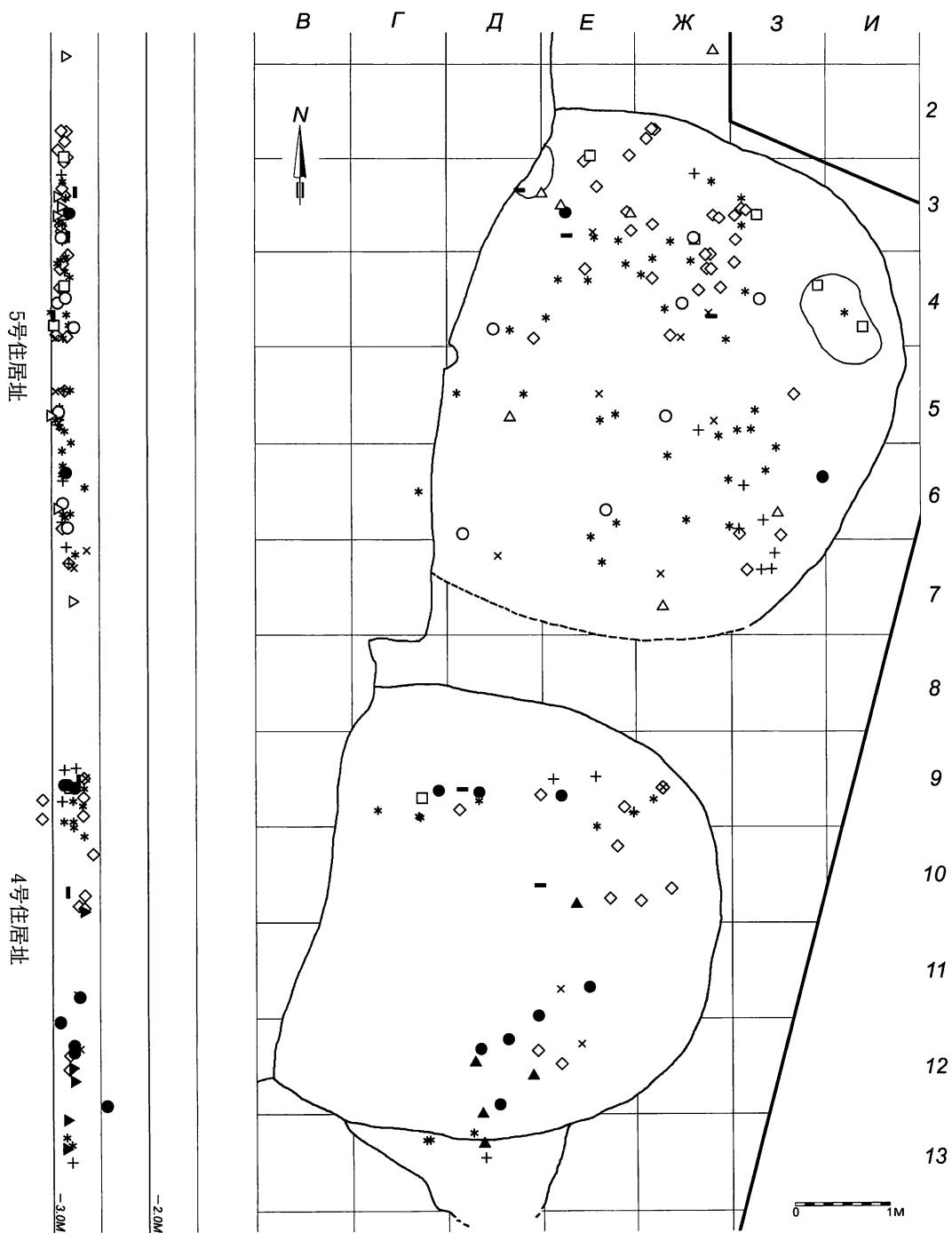


図5 沿海州南部の新石器時代土器型式





- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| ◇ B1a | * C1a | ▬ A1f |
| □ B1b | ○ C1b | △ A1g |
| ▲ B2a | + C2a |       |
| × D1a | ● C3a |       |

図6 クロウノフカ1遺跡4・5号住居址内での土器分布状況

い。発掘調査時には出土遺物をすべて3次元的に記録して取り上げたが、共同発掘という煩雑な手作業のため、整理の過程を経て型式分類した土器すべての位置を把握することはできなかった。これまで対応できた分布状況からの検証という点で、必ずしもすべての土器出土状況を把握していないという点を断った上で、土器出土分布から検証を加えてみたい。図6の分布図によれば、B群1a類・1b類、C群1a・1b類、D群1a類というクロウノフカ第1様式とB群2a類、C群2a類・3a類のクロウノフカ第2様式という大きな区分において、前者は5号住居址に主として分布しており、後者は4号住居址に主に分布しているという差異が認められる。また、4号住居址内部でも、その北側ではB群1a類の第1様式が主として分布しており、4号住居址南側ではB群2a類やC群3a類の第2様式が主に分布している。これは4号住居址内への埋積状況が異なっていたことに起因する可能性がある。前者は北側部分から住居址中央部分に流れ込んだ可能性があり、後者は南側から流れ込んだものであり、二つのグループは別の埋積母胎から発信されたものである可能性がある。また、第2様式のC群2a類土器は、4号住居址だけではなく5号住居址まで分布しており、両者で接合関係を示すものがある。とすれば、5号住居址埋没後、さらに4号住居址が設けられ、さらに4号住居址南側から北側へという埋積方向の延長で、5号住居址上面にC群2a類などの第2様式土器群の一部が流れ込んだというふうに解釈できるのではないだろうか。概略的かつ恣意的な証拠ではあるが、これによってクロウノフカ第1様式と第2様式を時期差あるいは様式差として捉えうるのが可能になったのではないかと思われる。

### 3 ザイサノフカ7遺跡

ザイサノフカ7遺跡の土器は、土器の器種として深鉢形土器、コップ形土器、壺からなる。深鉢形土器やコップ形土器に施される文様は、撚糸文である縄線文とヘラ描き沈線文からなり、クロウノフカ1遺跡との連続性を理解できる遺跡である。また、縄線文の中には、ハッチング状の集線文から成るものもあり、クロウノフカ1遺跡と年代的に接近した遺跡であることを理解できよう。しかし一方で、ザイサノフカ7遺跡の場合、横方向に施される綾杉文が主体であるところから、クロウノフカ1遺跡に後出する段階であることが予想される。また、綾杉文以外にも綾杉文が簡素化した斜線文も認められる。これらの土器群を、文様の製作技術に応じた系譜関係を基礎に、さらに文様構成、器種という具合に階層的に属性を付加して区分することによって、クロウノフカ1遺跡と同じように型式細分を行っていく。

#### (1) 土器の型式分類 (図1～図3・図5)

##### B群土器群 (縄線文グループ)

###### ①深鉢

2a類 (図1-17、報告書深鉢a類)：縄線文で多段に文様を施すもの。口縁部上段にはハッチング状の集線文を施し、その下段に平行線文、さらに下段に綾杉文を施すものである。クロウノフカ1遺跡のB群1a類に比べ、分割横帯文が簡略化しており、分割のための平行線区画も存在しない。厳密に言えば、B群1a類とB群2a類との中間をなす型式であるが、平行線区画がなく、縄線文による複数の種類の横帯文からなることからB群2a類に含めておきたい。

3a類 (図1-19、報告書深鉢b類)：縄線文で口縁部から綾杉文のみが施され、分割文様帯を構成しないものを指す。

###### ②コップ形土器

3b類 (図1-20、報告書コップ形土器b類)：縄線文による綾杉文が多段に施されるものである。

深鉢B群3a類と同じ文様構成を示す。

#### C群土器群（沈線文グループ）

##### ①深鉢

3a類（図2-24、報告書深鉢d類）：ヘラ描き沈線文によって多段に文様帯が構成されるものを指す。口縁部文様帯が短斜線文であり、その下位に綾杉文が施されたり、口縁部文様帯が平行線文、さらに下位に綾杉文が施される土器である。深鉢C群1a類のような横帯区画の平行線文が存在せず、横帯文としての規範が弱いものである。

4a類（図3-30・31・33・34、報告書深鉢e類）：ヘラ描き沈線文で綾杉文のみが平行に多段に施されるものである。ザイサノフカ7遺跡においても最も普遍的に認められるものである。器形としては、口縁が外反する器形と内湾する器形が認められる。しかも、それらがそれぞれに大型と中型に区分でき、器種が大きく四つに区分できる。なお中型で口縁が内湾する器形（図3-34）は、鉢として器種を区分すべきものであるかもしれない。

##### ②コップ形土器

#### 4b類（図3-35・36、報告書コップ形土器c類）

ヘラ描き沈線文により多段に綾杉文を施し、底部付近は無文のものである。深鉢C群4a類と同じ文様構成を示す。

##### ③壺

1c類（図5-50～53）：頸部は無文であり、頸部過半から胴部にかけて、縄線文によっていわゆる渦文が施されるものである。

#### D群土器群（縄線文と沈線文の折衷土器）

##### ①深鉢

1a類（報告書深鉢c類）：口縁部は縄線文によりハッチング状の斜線文が施され、口縁部以下の文様帯は、ヘラ描き沈線文により多段に文様帯が施されるもので、文様構成は深鉢C群1a類と同様なものである。施文技術からすると縄線文と沈線文の複合文様として理解される。

##### ②コップ形土器

2b類（図1-18、報告書コップ形土器a）：口縁部に縄線文による斜線文、その下位にヘラ描き沈線文による平行沈線文、さらに下位にヘラ描き沈線文で斜線文を施すものである。縄線文土器と沈線文土器の折衷タイプであり、文様構成的には深鉢B群2a類と同じものである。

#### (2) ザイサノフカ7遺跡の位置づけ

ザイサノフカ7遺跡の土器とクロウノフカ1遺跡の土器を比較すると、縄線文土器とヘラ描き沈線文土器が共存するところに共通性が認められる。クロウノフカ1遺跡の土器分析で、クロウノフカ第1土器様式と第2土器様式に型式学的に細別し、これらが4号住居址と5号住居址の覆土内の埋積状況において時期差が存在することを、出土位置の分布から示した。ザイサノフカ7遺跡の土器群は、クロウノフカ1遺跡の第2土器様式に型的には類似している。複合文様帯から成る深鉢C群3a類（図2-24）は、クロウノフカ第1土器様式に文様構成においては類似しているが、個々の文様帯の集線文などはクロウノフカ第1土器様式より退化した文様構成からなり、さらに直線文区画などを持たない分割文様帯を構成することからも、基本的にクロウノフカ第2土器様式に属するものである。ザイサノフカ7遺跡の主体をなす深鉢C群4a類あるいはこれと同じ文様構成で縄線文からなる深鉢B群3a類は、文様構成が多段の綾杉文から成り、クロウノフカ第2土器様式よりはさらに分割文様帯がなくなり単純な文様構成が多段に繰り返される文様のみからなることから、さらに新しい段階

であるとすることができる。

文様が綾杉文のみからなり、クロウノフカ第2土器様式より文様構成が簡素化していることから、ザイサノフカ7遺跡の主体である深鉢B群3 a類・C群4 a類とコップ形土器C群4 b類は、明らかにクロウノフカ第2土器様式より新しい段階のものである。したがって、深鉢B群3 a類・C群4 a類とコップ形土器C群4 b類をザイサノフカ7土器様式として抽出することにする。なお、嘗てザイサノフカ7遺跡第1段階としたものはここでいうクロウノフカ第2土器様式にあたり、ザイサノフカ7遺跡第2段階としたものがザイサノフカ7様式としたものにあたる (Miyamoto2005)。

さて、クロウノフカ第1土器様式にも存在していたコップ形土器は、ザイサノフカ7土器群にも存在している。コップ形土器は文様構成と施文技術の共通性から、深鉢土器との共伴関係を推定することができる。主体をなすザイサノフカ7土器様式の深鉢C群4 a類にはコップ形土器C群4 b類が、深鉢B群3 a類にはコップ形土器B群3 b類が共伴すると考えられる。

このようにザイサノフカ7土器様式は、器種として深鉢とコップ形土器が存在する点ではクロウノフカ1遺跡と同じであるが、主体をなす深鉢C群4 a類はさらに器形や規格によって細分が可能である。既に述べたように、深鉢C群4 a類は大きく四つの規格と器形に細別でき、器種の増加を示しているよう。

さらに、時期的に注目すべきは壺1 c類の存在である。壺はボイスマン文化やクロウノフカ1遺跡には存在しない。特にクロウノフカ1遺跡に壺が存在しない点から見れば、壺1 c類はクロウノフカ第2土器様式には存在しないものであろう。したがって、ザイサノフカ7土器様式に壺1 c類が相当するものとするのが最も合理的であろう。また、壺1 c類の文様は胴部に施文され渦文をなすが、渦文内は細かい縄線文によって充填されている。この点からは縄線文が存在する段階がふさわしいといえ、ザイサノフカ7土器様式には少数ながらも縄線文のB群土器が存在することからも、共時性には矛盾は存在しないといえよう。このように、ザイサノフカ7土器様式には、深鉢、コップ形土器以外に新たに壺が加わる土器様式を形成することとなった。

#### 4 ザイサノフカ1遺跡

アンドレエフが1954年に発掘したザイサノフカ1遺跡の資料を見る限り、刺突文系のボイスマン文化期のA群土器群、沈線文系のC群土器群が存在するものの、基本的には縄線文系のB群土器群が欠落しているところに特徴が見られる。A群土器群は、櫛状工具などによって横方向に連続刺突するもので、ボイスマン文化期の土器である。文様の特徴や口縁部の断面形態から幾つかに分類することができる。ここではボイスマン2遺跡の調査成果に基づき5段階に分けたモレヴァの分類 (Moreva 2003) に基づき、型式設定したい。さらに、櫛歯状工具によって施文するE群が見られる。ただし櫛歯状工具による刺突状押し引き文はボイスマン文化期にも認められるが、それらとここでいうE群の櫛歯状工具は異なるものである。

##### (1) 土器の型式分類 (図1～図5)

##### A群土器群 (刺突文系グループ)

###### ① 深鉢

1 a類 (図1-1、報告書1 e類) : 三角形の窩文が押圧され、その下位に縄線文が施されるものである。縄線文は絡条体圧痕によるものであり、撚糸による縄線文ではない。三角形窩文は、モレヴァの分類によるボイスマン文化土器群第1段階に存在している。

1 b類 (図1-2、報告書1 a類) : 口縁端部が面取りされ、断面が方形に近く肥厚するものであ

る。ボイスマン文化土器群をモレヴァが5段階に区分しているが、口縁部形態からみれば、その第2段階とした土器にあたる。この口縁端部と肥厚部分に3単位の櫛状工具で押し引きを施し、肥厚部そのものに段差を示すものである。

1 c 類 (図1-3、報告書1 b 類) : 口縁端部がやや外反気味であり、口縁端部内面が面取り気味で先端部が尖り気味のものである。口縁下部には窩文交互刺突文を横列に施すことによってできた波状の浮線文が認められる。しかし、この浮線文が波状文というよりは鋸歯状文を呈しているのは、窩文交互刺突に制約されたためである。さらに波状浮線文の下位に刺突文が認められる。モレヴァの分類によるボイスマン文化第3段階に相当する。

1 d 類 (図1-4、報告書1 c 類) : 1 b 類と同じような口縁部形態で、口縁下部に波状の浮線文を施すものであるが、1 b 類に比べより曲線化して明確な波状文となっている。また、その下位の連続刺突文が、円点状の連続刺突文で施されるところに特徴が見られる。その連続円点状刺突文は3~4点で1単位をなすようである。モレヴァの分類によるボイスマン文化第4段階に相当する。

1 e 類 (図1-5、報告書1 d 類) : 口縁が外反するものであり、口縁下の波状文は認められない。また、口縁端部内面に短斜線状の刻目が施される。また、外面の刺突文の一部は1 d 類に類似した円点状刺突文である。口縁内面の刻目は珍しいが、モレヴァ分類のボイスマン文化第5段階に相当しよう。

1 f 類 (図1-7、報告書1 f 類) : 1 c 類や1 d 類と同じような円点状の刺突文である櫛状工具で羽状形に横方向に刺突が施されるものである。伊藤慎二がウスチノフカ8遺跡の出土資料を使ってザイサノフカ古段階 a 類としたものがこれに相当する (伊藤2005)。

#### C 群土器群 (沈線文系グループ)

##### ① 深鉢

2 a 類 (図2-29、報告書2 a 類) : 細い沈線文で平行線区画帯を持ちながら、その間を三角集線文などで埋めていく平行分割文帯からなるもの。

3 a 類 (図2-26、報告書2 a 類) : 沈線文によって直線文や綾杉文などの分割文様帯が多段に構成されるもので、平行直線文による横帯区画をもたないものである。

4 a 類 (図3-32、報告書2 b 類) : 沈線文による幅広の綾杉文が施されるもので、いわゆる横走魚骨文をなすものである。これには深鉢とコップ形土器、また鉢も見られる。

5 a 類 (図4-37~40、報告書3 a・3 b 類) : 口縁下に c 字形の刺突文一列施されるか、口縁下に二列の直線上の連続刺突文が施されるもので、その下に多段に綾杉文が施されるもの。

6 a 類 (図4-41・42、報告書3 c 類) : 口縁下に一条の直線文が施され、その下に多段の綾杉文が施されるものである。

7 a 類 (図4-43、報告書4 a 類) : 沈線による多段の綾杉文が施され、口縁端部に刻みが施されるもの。

8 a 類 (図4-44・45、報告書4 b 類) : 沈線による多段の綾杉文が施され、口縁端部に1条の隆帯が施され、隆帯上に刻目が施されるもの。

##### ② コップ形土器

3 b 類 (図2-27、報告書2 a 類) : 横方向の多条の沈線文と三角形文が複合されたものである。三角形文内に列点文が充填されており、深鉢のC群2 a 類のもの (図2-29) に類似している。また、多条の沈線文とそれを縦列に分割する文様構成を含むものである。

##### ③ 壺

2 c 類 (図 5 - 54・55、報告書 7 類) : 短い口縁が外反する壺形土器である。胴部には平行直線とその間を斜線文によって充填する文様帯により、斜線ないし V 字形の文様帯を構成するものである。

#### ④鉢形土器

1 d 類 (図 5 - 57、報告書 2 b 類) : 沈線文による綾杉文が 1 列に帯状に施されるもの。

#### ⑤盆形鉢

1 e 類 (図 5 - 59、報告書 8 a 類) : 口縁がやや内湾気味での鉢で、ふつうの鉢に比べ底径が短い割に背の高いものを盆形鉢とここでは呼ぶ。平行直線内を斜線文によって幾何学文を構成するものであるが、幾何学文は直線文帯とその下に斜線文帯を構成するものである。雷文を構成しないもので、壺形土器と文様構成は類似し様式的な類似性を見せるもの。

#### E 群土器群 (櫛歯状工具グループ)

##### ①深鉢

1 a 類 (図 4 - 46、報告書 5 a 類) : 口縁下に一条の沈線文が施され、その下部に櫛歯状工具で直線上に多条に施されるもので、櫛歯状工具を上から下に向けて押し引き状に多段に施されるものである。

2 a 類 (図 4 - 47、報告書 5 b 類) : 口縁下に沈線は施されないまま、櫛歯状工具で押し引き状に多段に刺突されるものであるが、結果的には多条の沈線文状に施されているもの。

3 a 類 (図 4 - 48・49、報告書 6 a 類) : クラーク 5 遺跡の新石器時代文化層に顕著な土器であり、下から上に向けて掻き上げ状に刺突が施されるものである。口縁が外反気味の深鉢で、下から上に向けて掻き上げ状に刺突文が施される。

##### ②壺

2 c 類 (図 5 - 56、報告書 6 d 類) : 壺形の器形であり、沈線で区画された中を下から上に向けての掻き上げ状の刺突文が施されるもの。

##### ③鉢形土器

4 d 類 (図 5 - 58、報告書 6 b 類) : 浅鉢状の器形をなし、下から上に向けて掻き上げ状に刺突文が施される。また、鉢状の小型の器形で、下から上に向けての掻き上げ状の刺突文が局所的に施され、その両側に細い沈線が施されるもの。掻き上げ状の文様は深鉢 4 a 類のものと同様である。

##### ⑤盆形鉢

2 e 類 (図 5 - 60・61、報告書 8 b 類) : 壺形の器形であり、二条の区画線内を斜線状の細かい櫛歯文で充填したジグザグ状や雷文の幾何学文からなるもの。幾何学文の構成は、斜線状のもの、三角集線状の文様に加わるもの、クランク状の雷文をなすものなどがみられる。最も普遍的なものは雷文である。

#### (2) ザイサノフカ 1 遺跡土器の位置づけ

ザイサノフカ 1 遺跡出土土器はボイスマン文化期とザイサノフカ文化期のものからなるが、編年的にその間に来るべきクロウノフカ第 1・第 2 土器様式の縄線文土器が認められず、欠落している。ザイサノフカ 7 遺跡では縄線文土器はみられたが、クロウノフカ第 2 土器様式の綾杉文と集線文が組み合わせられた分割文様帯の深鉢 B 群 2 類や C 群 3 類からなり、クロウノフカ第 1 土器様式の平行分割線による多段の分割文様帯からなるものに比べ、簡略化していた。ザイサノフカ 1 遺跡では、ザイサノフカ 7 遺跡の深鉢 C 群 2 a 類・3 a 類と分類した簡略化した分割複合沈線文とともに、ザイサノフカ 7 遺跡で主体を占めていた深鉢 C 群 4 a 類とした綾杉沈線文が認められる。いわゆる魚骨文からなるものである。この深鉢 C 群 4 a 類に共伴するものとして、ザイサノフカ 7 土器様式では渦文からなる

壺形土器が存在した。ただ主体となる深鉢C群4a類土器は綾杉沈線文であるが、綾杉文が幅広で間隔が開くものがあり、ザイサノフカ7遺跡第3段階として時間差を想定したことがある(Miyamoto2005)。ザイサノフカ1遺跡の綾杉文である深鉢C群4a類は、口縁と文様帯の間にやや無文帯挟んでから施文されており、ザイサノフカ7遺跡第3段階のような時期差を想定することも可能かもしれない。しかし、綾杉文の長さや間隔が開くという基準は恣意的なものであり、明確な分類基準とは成り得ないところから、ここでは深鉢C群4a類をさらに細分することはしない。恣意的にはザイサノフカ7遺跡第3段階とする時期は存在しようが、細分の客観化が問題であるところから、ここではあえて細分しないこととする。

ザイサノフカ7遺跡にはみられないが、同じ綾杉沈線文からなるものが、ザイサノフカ1遺跡の深鉢C群5a・6a類である。口縁下に刺突文や平行沈線文が施され、その下位に綾杉沈線文が施されるものである。同じく平行沈線文下に櫛歯状工具による連続押し引き文が施される深鉢E群1a類もザイサノフカ7遺跡には存在しないものであり、口縁下に平行沈線文という共通の文様属性からいえば、深鉢C群6a類と共時的存在であると考えられる。この点で盆形鉢2e類とした幾何学文構成の鉢は、二条の平行沈線文内を細かい櫛歯状工具で斜線文状に充填していく文様構成をなすが、櫛歯状工具を使うという点では、深鉢E群1a・2a類と同時性を示すものである可能性が高い。

ノヴォセリシエ4式(Klyuev et al. 2002)とすべき口縁刻目隆帯の深鉢C群8a類は、深鉢C群4a類の綾杉沈線文土器の系統にあり、口縁が外反し、口縁端部を刻む深鉢C群7a類を介して、口縁刻目隆帯の深鉢C群8a類が出現したと考えれば、型式学的な変化はなめらかなものである。

一方、櫛歯状工具による刺突文によって綾杉文や、連続直線文を引いていく深鉢E群1a・2a類土器は、ザイサノフカ7土器様式には存在せず、ザイサノフカ1遺跡に特有なものである。とすれば、これらはザイサノフカ7式より新しい段階のものであることは明らかであろう。口縁下に平行直線文を施すなど深鉢C群5a・6a類と共時性を示している。深鉢C群5a・6a類と深鉢E群1a・2a類がザイサノフカ1土器様式とすべきであろう。壺形土器2c類はザイサノフカ7土器様式に存在しないところからすれば、このザイサノフカ1土器様式に含まれるものと考えべきであろう。

下から上に向けて掻き上げるように刺突文を施すことに特徴があるクラーク5式は、ここでいう深鉢E群3a類に相当するが、深鉢E群1a・2a類の櫛歯状工具による刺突文が退化する形でクラーク5式の刺突文に変化したとすれば、文様の変化過程としては理解できるものである。これが妥当とするならば、深鉢C群5a・6a類とE群1a・2a類を含むザイサノフカ1式よりクラーク5式は後出するものであると考えられる。

## 5 クラーク5遺跡

2004年のクラーク5遺跡の発掘調査では、上位層であるヤンコフスキー文化の包含層のみが発掘調査された。そこでは、ヤンコフスキー文化の土器以外に下位層に存在するはずの新石器時代文化期の土器が混入していた。まず、新石器時代土器を型式学的に分類し、下位層に存在する深鉢E群3a類を中心としたクラーク5土器様式の内容を推定してみたい。本来であれば、2005年度調査資料を交え、ヤンコフスキー文化の下位に存在するクラーク5式単純期の貝層を中心に分析すべきであるが、現在整理中であるため、これにふれることができず、上位層での型式分類にて終始することにしたい。

### (1) 型式細分

#### A群(押し引き文系グループ)

押し引き刺突文を連続的に行い曲線状に多列に施すもの(報告書a1類)と、c字形の刺突で横方

向に押し引いていくもの（報告書 a 2 類）に分かれる。前者はボイスマン文化期の土器の特徴を持ち、ボイスマン文化第 1・第 2 段階（Moreva 2003）に属する可能性が高い。後者（報告書 a 2 類）はボイスマン文化期の刺突文系土器に比べ刺突の密集度を欠き、クロウノフカ 1 遺跡のものに近いもので、本稿の A 群 1 g 類に属そう。

#### B 群（縄線文系グループ）

縄線文土器である。クロウノフカ 1 遺跡で代表的な文様構成である。撚糸文状の縄線文が施されるものと、短い条で斜線文状に施された縄線文に分かれる。前者はクロウノフカ第 1 土器様式に、後者はクロウノフカ第 2 土器様式に属する可能性の高いものである。

#### C 群土器（沈線文系グループ）

2 a 類：細い沈線文からなるものであるが、平行線文によって区画し斜線によるハッチング文様や斜格子文を多段に施す分割文様帯からなるもの。

3 a 類：短い斜線によって綾杉文を多段に施すものである。綾杉文の単位が短いことや、別に短斜線文が施された土器片も存在することからも、これらが組み合わさった分割文様帯を構成する深鉢 C 群 3 a 類土器である可能性が高い。

8 a 類：口縁端部に刻目隆帯が 1 条貼り足されるもので、おそらくその下位に沈線文による綾杉文が多段に施されるものであろう。

#### E 群土器（櫛歯状工具グループ）

3 a 類：下から上に向けて施文工具を掻き上げるようにして連続刺突文を施すものである。器形は口縁がややすぼまり、口縁端部が外反するところに特徴があり、B 群と C 群土器の口縁が基本的に外側に開く深鉢形態とは器形を異にしている。特徴的な下から上に向けて櫛状工具を掻き上げる連続刺突文に特徴がある。これらはこれまであまり注目されてこなかった土器であり、遺跡名を取ってクラーク 5 式と呼ぶことにしたい土器型式である。

#### (2) 土器型式の位置づけ

クラーク 5 遺跡では、ボイスマン文化期の A 群とクロウノフカ第 1 土器様式の深鉢 B 群と第 2 土器様式の深鉢 B 群ならびに C 群 2 a 類・3 a 類が認められ、ボイスマン文化期とクロウノフカ 1 遺跡のクロウノフカ第 1・2 土器様式以前と、深鉢 C 群 8 a 類と深鉢 E 群 3 a 類に限られる。したがって、ザイサノフカ 7 土器様式とザイサノフカ 1 土器様式が欠落していることになり、単純に深鉢 E 群 4 a 類と深鉢 8 a 類がザイサノフカ 1 土器様式以降に存在することが明確となったであろう。上記のザイサノフカ 1 遺跡の分析で示したように、クラーク 5 土器様式としては深鉢 E 群 3 a 類、壺 3 c 類、鉢 2 d 類、盆形鉢 2 e 類が存在することになるのである。

## 6 沿海州南部地域の土器編年

以上、4 遺跡の出土土器内容から、深鉢、コップ形土器、壺、鉢、盆形鉢といった器形によって認識される器種ごとに、その施文属性から見た系統性すなわち型式学の組列にも相当する A～E 群土器と、その文様構成から細別した型式単位を、各遺跡ごとに示した表が表 1 である。型式単位の組み合わせが、器種や文様属性の系統性を横断して同一の文様構成によって共時性が認められるが、このことが同一の様式であることを示すと考えるのである。

これによって、ボイスマン文化期が 5 段階に、さらにクロウノフカ第 1 土器様式、クロウノフカ第 2 土器様式、ザイサノフカ 7 土器様式、ザイサノフカ 1 土器様式、クラーク 5 土器様式、さらにこの後半段階にノヴォセリシェ 4 土器様式が重なってくると可能性が考えられる。ボイスマン文化期には



様式	クローノフカ1				ザイサノフカ7				ザイサノフカ1					クラーク5									
	深鉢				コップ形土器		深鉢		コップ形土器		壺	深鉢		コップ形土器		壺	鉢	盆形鉢	深鉢				
	A群	B群	C群	D群	B群	C群	B群	C群	D群	B群	C群	D群	A群	C群	E群	C群				A群	B群	C群	E群
ボイスマン												1a 1b 1c 1d 1d 1e											○ ○
ハンシ1	1f 1g 1a 1a 1a				1b 1b			1a				1f											1g ○
クローノフカ1	2a 2a 3a					2a 3a		2b 3b				2a 3a			3b								○ 2a 3a
ザイサノフカ7						3a 4a		4b	1c			4a											
ザイサノフカ1												5a 1a 6a 2a				2c	1d	1e					
クラーク5															3a		3c	2d	2e				3a
ノヴォセリシエ4												7a 8a											8a

単純な深鉢しか存在しなかったものが、クローノフカ第1・第2土器様式段階には深鉢とコップ形土器、さらにザイサノフカ7土器様式段階には深鉢・コップ形土器に加えて壺や鉢が、さらには深鉢内にも器形や規格から複数の土器が製作されるに至る。さらにザイサノフカ1土器様式に至ると、コップ形土器が消滅するものの、深鉢・壺・鉢に加え盆形鉢が新たな器種として加わっていく。そしてクラーク5土器様式段階には、深鉢・壺・鉢・盆形鉢が安定した器種構成として普及し、特に雷文からなる盆形鉢が目立つことになるのである(図7)。なお、本稿では土器型式や土器様式の系統的な変化を示すことに主眼を置き、様式的な段階性が時間軸を示すことと合わせて、各段階を様式期と呼ぶことにする。

### (1) ボイスマン文化期

ザイサノフカ1遺跡は、ボイスマン文化期とザイサノフカ文化期の土器からなる。ボイスマン文化期はボイスマン2遺跡の分析から、ボイスマン文化期下層のボイスマン文化原段階が存在し、さらにボイスマン文化期がモレヴァによって5段階に分けられている(Морева 2005)。ザイサノフカ1遺跡では既に述べたように、これらのうち第2段階から第5段階までは連続的に遺物が存在することは明らかである。問題は、深鉢A群1a類の窩文と絡条体圧痕からなる土器片(図1-1)がボイスマン第1段階に属する可能性があるものの、口縁部形態が不明であることから断定できない。ただし、深鉢A群1a類の窩文や絡条体圧痕文の存在は、内陸部のルドナーヤ文化との何らかの接触の中で生まれてきたものの可能性があるであろう。ともかく、ザイサノフカ1遺跡もボイスマン文化期を通じて使用された居住地であることを知る事ができる。

さらに、ザイサノフカ1遺跡には、深鉢A群1d類・1e類と同じ円点状の櫛状工具で羽状文が施文された深鉢A群1f類が認められる点が注目される。深鉢A群1f類は、伊藤慎二がボイスマン文化とザイサノフカ文化を繋ぐものとして設定した土器である(伊藤2005)が、その施文具の類似した形態や刺突文である同一施文方法である点からも、ボイスマン文化に連続する土器であると考えられる。ただ伊藤の言うようにザイサノフカ文化期初頭に1時期として独立した様式として位置付けうるには、慎重にならざるを得ない。ともかくボイスマン文化期5段階は、土器内容から見れば、東北朝鮮の西浦項2期(金用環・徐国泰1972)の典型的な土器であり、西浦項2期から西浦項3期の過渡

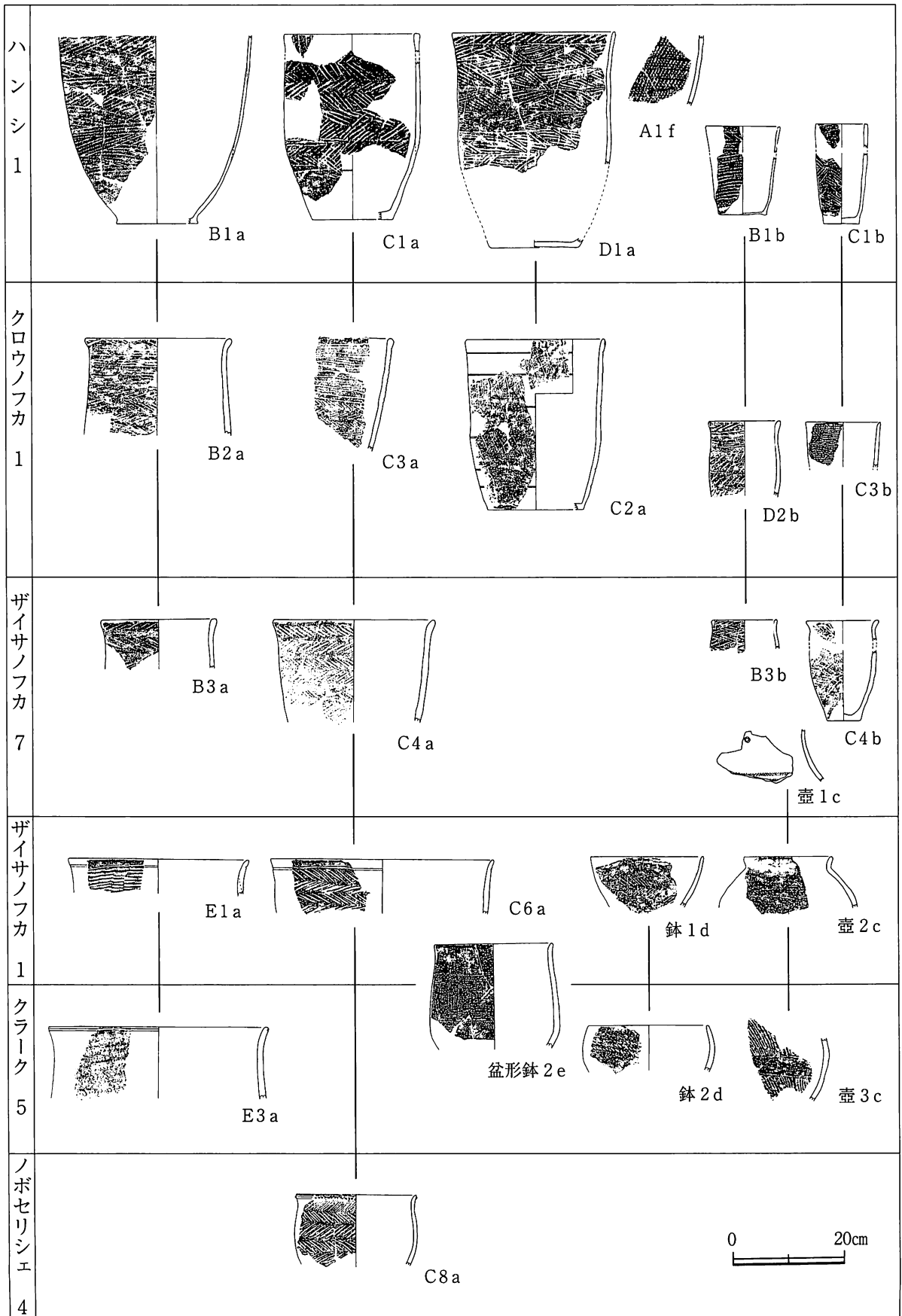


図7 沿海州南部新石器時代後半期土器編年

期としたクロウノフカ第1式・第2土器様式 (Miyamoto2004) より、遡る段階のものであることは間違いない。ボイスマン文化5段階に系統を引く深鉢A群1f類が、土器の伴出状況からすれば、クロウノフカ第1土器様式と共伴している可能性が高いであろう。

## (2) ハンシ1式期・クロウノフカ1式期 (クロウノフカ第1・第2土器様式)

本稿でクロウノフカ第1土器様式・第2土器様式でB群土器としたものが、近年注目されている縄線文土器である。重布力型縄線文土器として、沿海州南西部から黒龍江省南部に広がる土器として注目されている (福田ほか2002、Moreva et al. 2002)。これまでピョートル大帝湾を中心に発見が続いており、特にボイスマン1遺跡で縄の施文が認められる縄線文土器が注目された。従来、沿海州南部では沈線文系土器としてザイサノフカ文化期の土器が知られていたが、ボイスマン1・2遺跡の調査により、ザイサノフカ文化期より層位的に古い刺突文系土器であるボイスマン文化期の土器が発見された (Попов et al. 1997、Востречов et al. 1998)。これにより、沿海州南部の土器編年は、基本的に刺突文系土器であるボイスマン文化期から沈線文系土器文化期のザイサノフカ文化期へと変遷することが明らかになったのである。この変遷は、東北朝鮮の層位的な資料である西浦項遺跡での分期でも認められており、西浦項の資料を用いて沿海州南部の土器変遷を考えた大貫静夫の見解 (大貫1992) も基本的には同じものであった。しかし新発見の層位的な資料は確定的な沿海州南部での土器編年を確立することになったのである。東北朝鮮の西浦項1・2期がボイスマン文化期に相当し、西浦項3～5期がザイサノフカ文化期に相当している。ボイスマン1遺跡ではザイサノフカ文化期の古段階の土器も明らかになっており、注目された縄線文土器がこのザイサノフカ文化期古段階土器に含めて考え得る可能性が指摘されている (福田ほか2002、Moreva et al. 2002)。ボイスマン2遺跡でも単一層から縄線文土器がまとまって発見され、縄線文土器が沿海州南部での一つの土器型式であることが確定的になった (Moreva et al. 2002)。またルザノバ・ソプカ2遺跡の層位的発掘事例においても、ボイスマン文化層の第3層とザイサノフカ文化層の第2層の中間で縄線文土器が出土することが確認されている (Попов et al. 2002)。さらにボイスマン2遺跡の分析によれば、縄線文土器には、縄の原体を土器器壁に押しつけて文様を施すものと、縄を撚り糸状に回転させて文様を施すものとに分かれる。後者がクロウノフカ第1・第2土器様式にあたるが、前者は技法的にはボイスマン文化期のものである。また後者の土器要素がザイサノフカ文化古段階土器に近いものとされるものである。また、ボイスマン2遺跡では、ボイスマン文化で主体の刺突文系土器はボイスマン下層から出土し、縄線文土器が中層、ザイサノフカ文化土器が上層から出土するところから、層位的に区分することができる。さらに土器の形態からもザイサノフカ文化に近いものであるところから、縄線文土器の一群もザイサノフカ文化の範疇に入れ、ザイサノフカ文化古段階の土器と見なすべきとする考え方もある (Moreva et al. 2002)。しかし学史的にこの縄線文土器に最初に注目したのはアンドレエフであり、かれはこの土器群をハンシ1遺跡を以て抽出している (Андреев 1960)。また、ボイスマン文化がまだ発見されていない段階に、この地域の土器編年を整理した大貫静夫も現在のボイスマン文化をザレチェ文化とし、アンドレエフのいうザレチェ1→ハンシ1という変遷に注目し、ハンシ1と西浦項2期は近い時期のものである可能性を指摘している (大貫1992)。学史的に縄線文土器はハンシ1遺跡が標識遺跡になるところからも、様式名としてはハンシ1式を用いるべきであろう。ここでは仮にハンシ1式という名称で、ボイスマン文化とザイサノフカ文化をつなぐ段階の土器様式として設定しておきたい。そこで、クロウノフカ1遺跡で発見されたクロウノフカ第1土器様式を、ハンシ1式として暫定的に様式名を与えておきたい。さらに、ハンシ1式 (クロウノフカ第1土器様式) が在地的に変化したクロウノフカ第2土器様式をクロウノフカ1式と命名しておきたい。

さて、このように縄線文土器をハンシ1式として抽出する必要性は、この土器群の出自に一定の解釈が必要であるからである。現在これらの土器群がピョートル大帝湾周辺に分布していることが知られているが、新たにクロウノフカ1遺跡やルザノバ・ソプカ2遺跡のように、ウスリー江流域の内陸部においても縄線文土器群が発見されたことが重要である。同じように、縄線文土器群は黒龍江省尚志県亜布力遺跡からも発見されている（黒龍江省文物考古研究所1988）。松花江上流域に存在する遺跡である。亜布力遺跡の土器は、縄線文手法と櫛状工具の刺突文が同一土器に施されるものであり、クロウノフカ遺跡で言うB群1a類とA群1f類が共存する土器群である。クロウノフカ遺跡5号住居址内の土器分布からも深鉢A群1f類は深鉢B群1a類と同じハンシ1式（クロウノフカ第1様式土器）である可能性が高いが、亜布力遺跡の土器文様構成からも、このことが妥当であることを示している。したがって、伊藤慎二がウスチノフカ8遺跡の分析でこのA群1f類を抽出して縄線文土器群より古い段階の土器とした（伊藤2005）が、その必要性はなく、それらは同時存在する土器様式であり、系統（組列）の異なる土器型式と考えるべきであろう。また、亜布力遺跡の深鉢の形態は口縁がやや内湾し肥厚気味であるところから、形態的にはより古い刺突文系のボイスマン文化土器に近いものであり、古い傾向を示している。縄線文という新しい施文技法がピョートル大帝湾岸で出現するとする積極的な証拠はないところから、こうした技法や土器群の出自を外部に求める方が妥当であろう。その意味で形態的にも古い亜布力遺跡など松花江上流域やウスリー江流域が本来の縄線文土器の拠点である可能性もある。クロウノフカ1遺跡の石器群も亜布力遺跡のものと類似している点もその感を強くするものである。

以上のような観点から、今後、縄線文土器は沿海州南部内陸部の重要な土器群となる可能性が高いであろう。そこで、ここでは学史的な標識遺跡をもとにハンシ1式と称しておきたい。そしてハンシ1式の内容も、クロウノフカ1遺跡の分析で明らかになったようにハンシ1式（クロウノフカ第1土器様式）からクロウノフカ1式（クロウノフカ第2土器様式）へ変遷していく。さらにハンシ1式を母胎にザイサノフカ文化が成立した可能性もある。また、クロウノフカ遺跡で発見された栽培穀物（Komoto&Obata2004）が、ハンシ1式段階から確実に伴うものであるならば、その流入経路と土器様式との関係は興味深い問題となるのである。すなわち栽培穀物伝播の内陸経路の可能性も存在するのである。

### （3）ザイサノフカ7式期

壺の出現は、器種の増加という点では注目すべきものである。このようにザイサノフカ7式期土器は、ハンシ1式・クロウノフカ1式（クロウノフカ第1・第2土器様式土器）よりさらに器種が細分化するとともに器種が増加しており、土器様式そのものが進化しているということができよう。

綾杉文を横方向に多段に施す文様構成は、これまで朝鮮半島東北部の西浦江3期の特徴とされてきた。その意味では、ザイサノフカ7式土器は西浦江3期に平行する段階である。近年報告書が刊行された吉林省和龍県興城遺跡（吉林省文物考古研究所ほか2001）でも、渦文が施された土器が出土している。興城遺跡は新石器時代が二時期に区分され、1期と2期に細別されている。さらに新石器時代1期は前段階と後段階に二分されている。このうち、最も古い興城1期前段階とザイサノフカ7式期土器とを比べると、前者が平描き沈線による綾杉文からなる土器が主体であり、ザイサノフカ7式期土器の深鉢C群4a類に類似している。しかも興城遺跡には縄線文が伴わないことも、ザイサノフカ7式期が単純に存在することを示している。興城遺跡1期前段階の炭素14年代はBP4800±140年であり、BC3000年前後を示すザイサノフカ7遺跡（Komoto&Obata2005）の炭素14年代より若干新しいがほぼ同じである点において、土器の型式学的検討と矛盾しないものと考えられる。

さて、興城1期前段階は西浦江3期併行ないしやや古い段階と報告書では述べられているが、ザイサノフカ7式期は、単純な横帯綾杉文からなる土器群であり、西浦項3期そのものであるといえる。しかも渦文からなる壺が伴うことは、西浦項3期の特徴である。さらには、これらの土器群が、朝鮮半島東北部から沿海州南部にかけて分布が認められるザイサノフカ文化の古段階の土器であるとともに、クロウノフカ1式（クロウノフカ第2土器様式）に後出する土器であることが明かである。

#### （4）ザイサノフカ1式期

ザイサノフカ7式にはみられないが、同じ綾杉沈線文からなるものが、深鉢C群5 a類・6 a類である。口縁下に刺突文や平行沈線文が施され、その下に綾杉沈線文が施されるものである。同じく平行沈線文下に櫛歯状工具による縦方向の連続押し引き文が施される深鉢E群1 a類もザイサノフカ7遺跡には存在しないものである。口縁下に1条の平行沈線文が施されるという共通の文様構成属性からいえば、深鉢C群5 a類と同時期な存在である可能性がある。また、2 c類の壺と1 e類とした盆形鉢はともに類似した幾何学文構成をなしており、平行沈線文内を斜線沈線文で充填するという共通の施文技法は、様式的に同時期のものである可能性が高いであろう。したがって、ザイサノフカ7遺跡に存在しない深鉢C群5 a・6 a類と深鉢E群1 a・2 a類の深鉢、2 c類壺、1 e類盆形鉢は一つの土器様式を構成する可能性が高い。そこでこれらの土器様式を共時的なものとして、ザイサノフカ1式期と呼びたい。

#### （5）クラーク5式期

下から上に向けて掻き上げるように刺突文を施すことに特徴があるクラーク5式は、ここでいう深鉢E群3 a類に相当するが、深鉢E群1 a類・2 a類の櫛歯状工具による刺突文が変化してクラーク5式の刺突文に変化したとすれば、文様の変化過程としては理解できるものである。深鉢E群1 a類は口縁直下に1条の沈線文が施されるが、クラーク5式（深鉢E群3 a類）にも同じように口縁直下に1条の沈線文が施されるもの（図4-48）がある。クラーク5式の沈線文が細沈線化していることから、深鉢E群1 a類から深鉢E群3 a類という変化方向が推定される。また、深鉢E群1 a類と深鉢E群3 a類は、同様に下から上に掻き上げるように櫛歯状刺突具で施文するものであり、連続する同一系譜の土器であるが、深鉢E群3 a類の方が櫛歯状工具の櫛歯が粗いものになっている。したがって、クラーク5式である深鉢E群3 a類（深鉢E群3 a類）は、ザイサノフカ1式である深鉢E群1 a・2 a類に直接後出するものと考えられる。吉林省延辺自治区和龍県興城遺跡（吉林省文物考古研究所ほか2001）の大半の土器もこのクラーク5式に相当しており、興城遺跡ではさらに雷文による盆形鉢2 e類を伴っている。盆形鉢2 e類はこのクラーク5式期に共存するものである可能性がある。盆形鉢2 e類は、2条平行沈線文内を細かい櫛歯状工具で斜線文状に充填していく文様構成をなすが、櫛歯状工具を使うという点では、深鉢E群1～3類と同時性を示すものであるかもしれない。特に盆形鉢1 e類または盆形鉢2 e類の雷文構成をなす盆形鉢や鉢は、咸鏡北道農浦洞遺跡（横山1934）でも認められるが、農浦洞の深鉢はC群4 a・5 a類やE群3 a類からなる。同じように吉林省延辺自治区龍井県金谷遺跡でも、ここでいう雷文からなる盆形鉢2 e類とともに、深鉢C群4 a類と深鉢C群5 a・6 a類の深鉢が伴っている（延辺博物館1991）。深鉢B群3 a類や深鉢C群4 a類と渦文壺形土器の壺1 c類からなるザイサノフカ7式期、深鉢C群5 a・6 a類や深鉢E群1 a・2 a類と壺2 c類、盆形鉢1 e類からなるザイサノフカ1式期の土器型式の型式群の差し引きからいえば、深鉢E群3 a類、鉢2 d類、壺3 c類からなるクラーク5式期に、この幾何学文からなる盆形鉢2 e類が伴うというふうに考えることもできるが、大きく幾何学文を帯びた盆形鉢2 e類がザイサノフカ1式期からクラーク5式期に共存することは間違いない。

さて、今回新しく型式設定されたクラーク5式段階は、西浦項第4期後半期に相当するが、グヴォズデヴァ4遺跡（Попов & Ватаршев 2002）や吉林省興城遺跡、あるいは北朝鮮咸鏡北道鐘城間坪遺跡（有光1962）などに類例がみられ、独立した土器型式であり、かつ特定の時期を示すものであることが考えられる。

ノボセリシェ4式（Klyuev et al. 2002）とすべき口縁刻目隆帯の深鉢C群8a類土器は、深鉢C群4a類・6a類の綾杉沈線文土器の系統にあり、口縁が外反し、口縁端部を刻む深鉢C群7a類を介して、口縁刻目隆帯の深鉢C群8a類が出現したと考えれば、型式学的な変化はなめらかなものである。問題は、ノボセリシェ4式とクラーク5式との関係である。ノボセリシェ4式はザイサノフカ1式の深鉢C群6a類の変化系列にあることは、綾杉沈線文などを持つことから理解される。一方、クラーク5式はザイサノフカ1式に属する深鉢E群1a類の系譜にあることからすれば、両者はザイサノフカ1式より後出するものの、系譜が異なる土器であると考えられる。しかしながら、これらが共伴する事例は少ない。ノボセリシェ4遺跡（Клюев et al. 2002）、アヌーチナ14遺跡（Клюев & Яншина 2002）やレッティホフカ=ゲオロギチェスカヤ遺跡（Коломиец et al. 2002、金材胤 et al. 2006）では、単独に口縁刻目文土器であるノボセリシェ4式が出土し、一方では興城遺跡にはクラーク5式土器は存在するものの、ノボセリシェ4式は存在しない。地域的な系統が異なる可能性がある。ただし、西浦項5期にはノボセリシェ4式は存在するもののクラーク5式は不明である。ザイサノフカ1式がほぼ西浦項4期に相当することからすれば、クラーク5式とノボセリシェ4式は、ほぼ西浦項4期～西浦項5期に相当する系統の異なった土器型式としておきたい。今後、資料の増加を待って時期細分や系統性の問題を明らかにしたい。

なお、金材胤 はレッティホフカ=ゲオロギチェスカヤ遺跡の分析から、西浦項3期に雷文と口縁刻目隆帯文土器が既に存在するとし、レッティホフカ=ゲオロギチェスカヤ自身の土器は他の口縁刻目隆帯文土器より遅い段階のものであり、西浦項4期ないしそれよりやや遅い段階としている（金材胤 et al. 2006）。レッティホフカ=ゲオロギチェスカヤ遺跡では、口縁刻目隆帯文土器と雷文の盆形鉢が共伴して存在している。レッティホフカ=ゲオロギチェスカヤの盆形鉢は、器形的にはザイサノフカ1遺跡のものより口縁の外反の度合いが大きく、より新しい段階のもと思われる。雷文そのものの構成も簡略化しており、また雷文は平行線文間を斜線文で充填されるものであり、クラーク5式段階の盆形鉢より新しい段階のもと考えられる。レッティホフカ=ゲオロギチェスカヤ遺跡を含む口縁刻目隆帯文土器を特徴とするノボセリシェ4式は、ザイサノフカ1式より遅い段階のものであり、すなわち西浦項4期より遅い段階のものである。特にノボセリシェ4式の中でも新しい傾向を示すレッティホフカ=ゲオロギチェスカヤ遺跡では、磨製の扁平片刃石斧など進出の磨製石器を含んでおり、新石器時代終末期の様相をより濃くしている。

## まとめ

ボイスマン文化に続く沿海州南部の新石器時代後半期の土器編年は、以上の土器様式としての把握の観点からすれば、ハンシ1式→クロウノフカ1式→ザイサノフカ7式→ザイサノフカ1式→クラーク5式→ノボセリシェ4式と変化していくと考えられる。これらの変化過程は、その前段階であるボイスマン文化5段階のC14年代が $4930 \pm 90$  B Pと $4815 \pm 95$  B P（未較正值、Moreva 2003）で、ハンシ1式段階のクロウノフカ4号住居址の炉址が $4740 \pm 40$  B Pと $4660 \pm 45$  B P（未較正值、Komoto & Obata 2004）と、矛盾なく比較的近接した段階のものであることが理解される。較正年代でいえば、ハンシ1式がB C 3500年頃、クロウノフカ1式～ザイサノフカ7式がB C 3300～3000年頃

(Nakamura et al. 2004、Komoto & Obata 2004・2005)、ザイサノフカ1式～クラーク5式がBC2500年頃 (Nakamura et al. 2004)、ノボセリシェ4式がBC2500～2000年頃 (Клюев et al. 2002) とすることができるであろう。

ハンシ1式期には、ボイスマン文化系統の刺突文系土器が残存しながらも、縄線文土器と沈線文土器が共存する段階である。ハンシ1式の出自は内陸部側にある可能性がある。縄線文や沈線文という新しい文様技術と分割文様帯という文様構成が内陸側の垂布力遺跡を中心に生まれ、それがウスリー江流域から沿海州南部海浜部へと広がっていった可能性が高い。この過程で、磨製の柳葉形石鏃などの新しい石器技術が広がった可能性がある。また、クロウノフカ1遺跡4号住居址出土のキビ (Komoto & Obata 2004) が確実なものであるならば、栽培穀物もハンシ1式の文化的な広がりの中で生まれたものの可能性が高いであろう。さらに、クロウノフカ1式はこのハンシ1式が在来的に受容変化した段階であると位置づけできるであろう。また、これらの段階は、深鉢とコップ形土器からなる土器組成をなし、ボイスマン文化期の深鉢のみからなる段階と大きく土器様式を異にしている。仮にこの段階を一つの文化段階と設定するならば、ハンシ1式とクロウノフカ1式を併せてハンシ文化と呼ぶべきであり、新しい系統の文化様式と見なすべきであろう。

このような変化過程を想定した場合、ザイサノフカ7式以降が従来のザイサノフカ文化と呼ぶ段階である。ザイサノフカ7式はクロウノフカ1式から系統的に変化したものであることは間違いない。ただしザイサノフカ7式段階から器種組成の変化がみられる。深鉢に壺形土器が加わる段階であり、深鉢も多様な規格からなるセット関係を示している。さらに磨盤・磨棒・石鏃といった華北型農耕石器 (宮本2003) が伴う段階であり、初期農耕化が定着し始めた段階と設定でき、大きく文化的な画期がみられる。このような画期を以てザイサノフカ7式以降をザイサノフカ文化期と設定すべきであろう。さらにザイサノフカ1式以降は、深鉢・壺にさらに浅鉢と盆形鉢からなる土器組成が確立する段階である。この土器組成はクラーク5式まで続いている。まとまった土器組成という観点からしても、ザイサノフカ7式からクラーク5式までをザイサノフカ文化期と設定すべきであろう。そして、このザイサノフカ文化期が狩猟採集社会に初期農耕文化が定着し始めた段階である。

新石器時代終末期であるノボセリシェ4式は、その成立過程も含めて不確かな点が依然として多い。土器の系統性からすれば、ザイサノフカ文化期の沈線文系土器に連続するものであることは間違いないが、刻目隆帯の出現など不明な点も多い。新石器時代終末期の土器変遷過程や土器分布からみた文化変容の系統性の問題などは、今後の課題であるといえよう。

以上、狩猟採集社会のボイスマン文化期から、新来のハンシ文化期の到来により初期農耕が伝播した可能性があるが、さらにザイサノフカ文化期には華北型農耕石器を受容し、深鉢・壺・浅鉢・盆形鉢からなる多様化した土器組成が定着する段階であり、狩猟採集社会における初期農耕の受容期と位置づけることができるであろう。

## 参考文献

日本語

有光教一1962『朝鮮櫛目土器の研究』(京都大学文学部考古学叢書第三冊)

伊藤慎二(2005)「総括」『21COE考古学シリーズ4 國學院大學21世紀COEプログラム2004年度考古学調査報告書 東アジアにおける新石器文化と日本Ⅱ』

延辺博物館1991「吉林省龍井金谷新石器時代遺址清理簡報」『北方文物』1991年第1期

- 大貫静夫1992「豆満江流域を中心とする日本海沿岸の極東平底土器」『先史考古学論集』第2集
- ゲ・イ・アンドレエフ1982「沿海州のサイサノフカ I 遺跡」『シベリア極東の考古学 2 沿海州篇』
- 佐藤達夫1963「朝鮮有紋土器の変遷」『考古学雑誌』第48巻第3号
- 福田正宏、デリューギン・ヴァレリー、シュフコムード・イーゴリ2002「ロシア極東地域における縄文をもつ土器について」『古代文化』第54巻第7号
- 宮本一夫2003「朝鮮半島新石器時代の農耕化と縄文農耕」『古代文化』第55巻第7号
- 横山将三郎1934「油坂貝塚に就いて」『小田先頌壽記念朝鮮論集』
- 中国語
- 黒龍江省文物考古工作隊1981「黒龍江寧安県鶯歌嶺遺址」『考古』1981年第6期
- 黒龍江省文物考古研究所「黒龍江尚志県亜布力新石器時代遺址清理簡報」『北方文物』1988年第1期
- 吉林省文物考古研究所、延辺朝鮮族自治州博物館2001「和龍興城-新石器及青銅時代遺址発掘報告」文物出版社
- 朝鮮語
- 金用環、徐国泰1972「西浦項原始遺跡発掘報告」(『考古民俗論文集』4)
- 金材胤、Kolomiets S. A.、Kypthi E. B.2006「東北韓新石器末期에서青銅器時代로의轉換期様相」『石軒鄭澄元教授停年退任記念論叢』
- 英語
- Komoto M., Obata H. et al. 2004 *Krounovka 1 Site -Excavation in 2002 and 2003-*. pp. 26-39, Kumamoto University, Japan.
- Komoto M., Obata H. et al. 2005 *Zaisanovka 7 Site -Excavation in 2004-*. pp. 22-32, Kumamoto University, Japan.
- Nakamura Tshio, Miyamoto Kazuo, Vostoretsov Y. E. 2004 AMS Radiocarbon Age Related with Archaeological Sites in Southern Primorye. In *Krounovka 1 Site -Excavation in 2002 and 2003-*. pp. 26-39, Kumamoto University, Japan.
- Miyamoto, Kazuo. 2004 Pottery from Neolithic Cultural Layers. In *Krounovka 1 Site -Excavation in 2002 and 2003-*. pp. 26-39, Kumamoto University, Japan.
- Miyamoto, Kazuo. 2005 Pottery. In *Zaisanovka 7 Site -Excavation in 2004-*. pp. 22-32, Kumamoto University, Japan.
- ロシア語
- Андреев Г. И. 1957 Поселение Зайсановка I в Приморье // *Советская Археология* No.2С.121-145
- Андреев Г. И. 1960 Некоторые вопросы культур южного Приморья тысячелетий до н. э. *Материалы и Исследования по Археологии, СССР*. No.86С.136-161 Ленинград.
- Бродянский Д. Л. 1979 Проблема Периодизации и Хронологии Неолита Приморья. // *Дребние Культур ы Сибири и Тихоокеанского Бассейна*. С.110-116Новосибирск.
- Востречов Ю. Е., Короткий А. М., Жушиховская И. С., Кононенко Н. А., Раков Ы. А., Беседнов А. Н., Тоизуми Т., Загоруйко А. В. 1998 *Перевые Рыболовы в Заливе Петра Великого, Природа и бревний человек в бухме Бойсмана*. Владивосток.
- Клюев Н. А., Сергушева Е. А., Верховская Н. Ъ. 2002 Земледелие в финальном Неолите Приморья (по материалам поселения Новоселище-4). // *Традиционная Культура Востока Азии*. С.102-126. Благовещенск.
- Клюев Н. А., Яншина О. В. 2002 Финальный Неолит Приморья, Новый взгляд на старую проблему. // *Россия и АТР*. No.3 (37). С.67-78. Владивосток.
- Коломиец С. А., Батаршее С. В., Крутых Е. Ъ. 2002 Поселение Реттиховка-геологическая (хронология, культурная принадлежность). // *Археология и Археологические Антропология Дальнего Востока*. С.90-102. Владивосток.
- Морева О. Л. 2003 Относительная периодизация керамических комплексов войсманской археологические археологической культуры памятника войсман-2. // *Проблемы Археологии и Палеоэкологии Северной, Восточной и Центральной Азии*. С.172-175Новосибирск.
- Морева О. Л., Попов А. Н., Фукуда М. 2002 Керамика с веревочным орнаментом в неолите Приморья.



*// Археология и Культурная Антропология Дальнего Востока . С.57-68. Владивосток.*

Попов А. Н., Ватаршев С. В. 2002 Археологические исследования в Хасанском районе приморского края в 2000 г. *// Археология и Культурная Антропология Дальнего Востока. С.74-83Новосибирск.*

Попов А. Н., Морева О. Л., Ватаршев С. В., Дорофеева Н. А., Малков С. С. 2002 Археологические исследования в Приханкайской низменности в юго-западном Приморье в 2002 г. *// Проблемы Археологии, и Этнографии, Антропологии Сибири и Сопредельных Территорий . С.179-184Новосибирск.*

Попов А. Н., Чикишева Т. А., Шлакова Е. Г. 1997 *Бойсманская Археологическая культура Южного Приморья (по материалам многослойного памятника Бойсмана - 2) .*Новосибирск.

# The Pottery Chronology of the Later Half of the Neolithic Age in the Southern Far East of Russia

MIYAMOTO Kazuo  
Kyushu University

We excavated at the Krounovka 1 site, the Zaisanovka 7 site and Klerk 5 site for these five years thorough the cooperative excavations with Institute of History, Archeology and Ethnology of the Peoples of the Far East, the Russian Academy of Sciences. These sites mainly date to the later half of the Neolithic Age in Far East. I analyzed the pottery chronology comparing with pottery of these sites in addition to those of the Zaisanovka 1 site, which Dr. Andreev excavated in 1954. These pottery are divided into four ornament technique of pottery; a punctured pottery, a cord marked pottery, an incised pottery, a punctured pottery with a comb. The other three ornaments except for a punctured pottery belong in the latter half of Neolithic. The same ornament patterns indicate the co-existence among different ornament technique. That is, the ornament patterns would be the indicator of the same pottery style. And I focus on the kinds of pottery form in addition to the ornament technique and the ornament patterns of pottery. Based on such as a typology of pottery, the pottery chronological framework is as below: Khansi 1 style, Krounovka 1 style, Zaisanovka 7 style, Zaisanovka 1 style, Klerk 5 style, Novoselische 4 style.

Khansi Culture contains Khansi 1 style and Krounovka 1 style. Khansi culture is consisted of a deep bowl and a cup form pottery which mainly ornamented with a cord mark and incised ornament. And at this period in the southern Far East of Russia, it may be imported the incipient agriculture from the inland area with new culture style of Khansi Culture, in which Yabuli site, Heilongjiang province of China, may be located in the geographical center.

Zaisanovka Culture contains Zaisanovka 7 style, Zaisanovka 1 style and Klerk 5 style. Zaisanovka Culture is consisted of a deep bowl, a jar, a bowl on the contrary of extinguishment of a cup form pottery. The ornament design is simpler than that of Khansi 1. The ornament technique is mainly consisted of incised ornament, although the cord marked pottery gradually distinguish and on the contrary the punctured pottery with a comb appear. This culture has an incipient agriculture with a Huabei style agricultural stone tools such as a stone pestle, a stone mortar and a stone hoe in subsistence activities of hunting-gathering society.

Novoselische 4 style is the final period of Neolithic Age. But the cultural content is not so clear. We still have to study the changing process to the final stage of Neolithic in this area.